



充実？した一セメ 尾関 寛之

自分の一セメの反省みたいになります。ですが書きます。大学生になって毎日が本当に楽しい。

一人暮らし、キャンプ、友達との遊びなど毎日が本当に楽しくすぐに夏休みが来てしまいました。きっと夏休みも本当に楽しくなると思います。

また、総合科学部の四十周年記念講演会という式典に参加して舞台上立ってインタビューを受けるというとてもいい経験をしました。総合科学部の大先輩とも話す機会を得ることができました。

でも、忘れてはいけないことがあります。それは前期のテストです。遊びすぎてすっかり忘れていました。一夜漬けやらでおそろく？単位は落としてない自信はあります(笑)

そんなこんなで一セメは無事終わったのですが、勉強面では反省すべきことがたくさんあるので二セメでは改善していきたいです。

でも大学へ入学して初めてのセメスターはとても充実して楽しんでいました。

「雨ノモマケズ 風ニモマケズ(中略) サウイフモノニワタシハナリタイ」

宮里 洋志

かの宮沢賢治の名作「雨ノモマケズ」を知らない人はほとんどいないだろう。最近は何かにつけて「だるい」とか言って物事をあきらめたり、中途半端に済ませてしまう人や、すぐに気に入らないことに攻撃的になったり、周りの目を気にしてばかりの人が多くなった気がす

る。そういう自分もこの典型であるのだが…。正直、宮沢賢治の詩を現代の日本人に当てはめることは野暮である。彼の詩には、当時の時代背景が色濃く映し出されているからだ。ただ、ある機会に、実に十年ぶり(小学生の時にとある)ZETAの番組で見て以来どううかに見て、どこか、彼が現代人に向けて発したメッセージなのではないかと感じた。

確かに、便利なことはすばらしい。楽なことは、何とも平穏で、嬉しいことである。ただ、人々がこれらを追い求めすぎた故に、ただの惰性になってしまつてはいないだろうか。その便利さボケに、現代人は忍耐力とか、苦勞をすることを忘れてしまつてはいないだろうか。

ただ言いたいことは、「たまには苦勞しようよ。そして、嫌なことあつたつて耐えてみない？」つてこと。それだけ。

そんな感じで、自分自身の批判を、現代人が自分自身であることへの知覚を麻痺させながら、論文調に語る暑夏の夕べであります。

金が欲しい 村田 章博

この世は金が全て
でも

部活をやつていてバイトをしないのはかなりきつい
あつという間に飛んでいく
それはまるで

湖面から羽ばたくフラミンゴの群れ
風に乗るタンポポの綿毛

四番バッターに投げられた高めの甘い球
そのさまは儂く、美しい

その美しさに魅せられる度に
僕の生活は苦しくなる

ああ この世はなんと矛盾しているのだろう

己斐 匠

中学生の時から夢見ていた広島大学への入学から四ヶ月が経ち、今私を感じていることは、時間が過ぎるのは一瞬だな、ということである。新歓行事があり、オリエンテーションキャンプがあり、ゆかたまつりがあり、期末テストがあり：あつという間に大学生活の八分の一が終わってしまった。まあ今まで生きてきた十八年もすぐに過ぎ去っていったので当然と言えば当然ではあるが。

私は縁あつて、総科26生で行う二つの大きな行事に役員として参加させていただいた。この二つの行事こそが時間の流れの速さを感じさせた大きな要素でもあるが、それ以上に、大学生の行動力の強さに驚いた(自分もその一員であるが)。自分たちは何でも出来るのだということ強く感じた。それゆえに、実行していく上で様々な問題や障害があり、正直投げ出してしまいたいと思った時もあったが、やりきった時の達成感もまた格別であった。クセになりそうだ。

そんな忙しい日々の中で、私は「自分の好きなことについてもっと深く考えてみよう」と考えている。例に出すと、先日行われたオープンキャンパスにおいて学内に大量に現れた、女子高生についてである。勘違いされそうだが、単に女子高生が好きなのではない。彼女らの発祥やルーツ、彼女ら特有の生感、「女子高生」「コ」という言葉のブランド化、男子高生や女子大生との比較など、このように総合科学することも可能なほど、女子高生とは興味深い「生き物」なのである。

女子高生について語ったおかげでこの文章をどう締めくくればよいか困るが、とにかく大学とは、色々なことができて、色々なことを考えられて、色々なことに興味を持てる場所であるということを読者の方に伝えたい。ではまたどこかで会いましょう。

晩、朝、昼と三食カレーライスが続いた日の深夜、散乱した自室の机にて

田んぼ 永野 明宏

4月に僕の新天地となる寺家を訪れた
その時、真つ先に感じた「田んぼ多いな」と
家のすぐ近くに黒瀬川が流れ、反対には田んぼが広がっている
まさに自然と一体になった環境。そこから僕と田んぼの物語が始まった

春は何も植えておらず、雑草がちらほらと見受けられるだけだった
しばらくすると、田植え機によつて次々と植えられていく稲たち

田んぼに水が張られ、瞬く間に田んぼに緑が甦った
風を受けて、まだまだ小さい稲がそよそよとゆれている

大学に通うたびに見かける稲たちは着実に成長し遅しくなっていく
小さな田んぼにたくさんの命が生きている

アメンボ、おたまじゃくし、蛙、ミジンコ、
みんなで競つて、互いに励ましあつて進化していく そんな関係(生態系)だ

本格的に夏を迎え、稲にとつて大切な時期がやってきた
この時期の頑張りが結果に大きく影響する

風がとても強く吹くと大きくなった稲が限界までしなる
踏ん張れ、お前ならやれる これまでお前の事を見てきた

僕なら分かる

この程度でお前は負けない もう少しの辛抱だ
これが発刊される頃、お前はどんな姿になっているのだろうか

そんなことに思いを馳せながら、今回は筆を置くこうと思う

